

-毛馬内盆踊りの発祥とその歴史-

代表者 1A 黒崎世那

指導者 神居恵悟

はじめに

毛馬内盆踊りは、秋田県三大盆踊りの1つに数えられ、地域の方々に古くから親しまれている鹿角市夏の風物詩である。十和田高校でも、毛馬内盆踊り同好会を中心に、卒業生含め多数の生徒が踊り手や楽器演奏者として毎年参加している。

本研究では、毛馬内盆踊りへ参加したり、盆踊り保存会の方々からお話を聞いたりといった活動から、その発祥や歴史について興味を持ったことを調べ、まとめる活動を行った。この活動が、毛馬内盆踊りの更なる発展のきっかけの一つになってくれればと願う。

I テーマ設定の理由

毛馬内盆踊りは、鹿角市に古くから伝わる伝統ある夏祭りの一つだが、十和田高校生の様子から、花輪ばやし、小坂七夕祭りなどと比較して、地元の若者の興味関心が低いように思える。しかしながら、毛馬内盆踊りには多くの歴史的背景があり、県外から訪れる観光客も多い。今回は、毛馬内盆踊りがどのようにして生まれたのか、振り付けにはどのような意味があるのか等について明らかにすることで、今後、盆踊りを見る際にその背景を感じながら見ることで、毛馬内盆踊りの魅力発信になり、若者の興味関心の増長につながるのではないかと考え、テーマを設定した。

II 実施計画

- 1 講座オリエンテーション
- 2 講師講話
毛馬内盆踊り保存会 馬淵大三氏
- 3 毛馬内盆踊り参加
 - ①毛馬内盆踊り講習会・練習
 - ②H29 毛馬内盆踊り～北の盆～参加
- 4 調査活動(インターネット・文献等による)
- 5 まとめ活動
- 6 発表準備

III 調査・研究内容

1 講師講話【毛馬内盆踊り保存会 馬淵大三氏】

鹿角市立十和田図書館に毛馬内盆踊り保存会から馬淵大三氏をお招きし、盆踊りの歴史に関する講話を頂いた。毛馬内盆踊りは、大の坂踊り、甚句踊り、毛馬内じょんから踊りの3部で構成されている。このうち、発祥とされているのは甚句踊りである。1566年、安東愛季の鹿角市攻め入りを機に、のちの南部藩領主、南部信直氏が三戸から出陣し、現在の鹿角市毛馬内に陣を張り、安東氏を領外へ追いやった。その際に、勝利を祝い踊った「陣後踊り」が転じて、現在の「甚句踊り」になったといわれている。ちなみに、この戦いで南部氏が陣を張った場所が、現在の「陣場」である。

その後、1657年、南部藩主桜庭光英の移封の際に岩手県宮古市から同時に伝来したものが、「念仏踊り」である。この念仏踊りが、現在の「大の坂踊り」のもとになったといわれている。念仏踊りは、お盆に現世にやってきた先祖の霊を成仏させるために踊るものであるといわれており、大の坂踊りでも、振り付けに手を合わせる仕草が残っている。



毛馬内盆踊り保存会 馬淵大三氏による講話

2 毛馬内盆踊りへの参加

十和田高校毛馬内盆踊同好会とともに、平成29年度の毛馬内盆踊りに参加した。8月21日～23日の3日間、毛馬内こもせ通りで開催されたが、天候の不良により、2日目は十和田市民センター体育館で行われた。事前の練習は、1年生全体で行われた保存会の皆様による盆踊り講習会と、夏休みに十和田市民センター体育館で盆踊り参加者のみの数回の練習会が行われた。

本番では、紋付の着物、頬被り等の衣装に身を包み、一般の参加者の方々に混じって参加した。一般の参加者の方々が多数あり、青森、宮城など県外から盆踊りを見に来られている方もいるようだった。大の坂踊り、甚句踊りはそれぞれ40分ほどで、毛馬内じょんからは20分ほどであった。観客の中には、踊り手を見て振りを真似している方や、甚句踊りでは飛び入りで参加する方もおり、伝統の継承と共に、人々の交流の場ともなっていて、地域から愛されている祭りなのだということがわかった。



毛馬内盆踊り講習会



北の盆2017 毛馬内盆踊り

IV おわりに

1 大の坂について

大の坂は、京都の念仏踊りの系譜を汲んでおり、岩手から伝わったものがもとになっている。お盆に現世に帰ってきた先祖の霊を成仏させるためにという意味で踊られ、合掌等の振りからも想像できる。初めは歌詞もあり、「先祖の霊が帰りに寂しさを忘れられるように」という願いで歌われていたが、節が明確に伝わっておらず、現在は歌われていない。

2 甚句について

甚句は1566年に南部信直が安東愛季の攻略を阻止し、領外へ駆逐したことを祝った際に披露された「陣後踊り」が起源とされている。大の坂が、死者に対して行われる幽玄な性質を持つのに対し、甚句は戦の勝利に由来するため、喜びや嬉しさといった情念を内包している。その歌詞も、郷土愛、豊作、恋愛等様々なジャンルのものがあり、厳かなながらも明朗な雰囲気の中で行われる。参観者の飛び入り参加もできる。

3 毛馬内じょんからについて

大の坂、甚句と比較してその歴史は浅く、弘前の陸軍の連隊に入営した若者たちが、津軽のじょんからを毛馬内に持ち込んだのが始まりといわれている。今年度は津軽三味線の伴奏もつき、3部の中では最もテンポが良く、色合いの違った雰囲気の中で行われる。

4 総評

今回の研究を経て、これまで慣れ親しんできた毛馬内盆踊りに様々な歴史的背景があったことを知り、これまでとは違う魅力を感じることができた。毛馬内盆踊りは、国指定重要無形民俗文化財に指定されており、鹿角が有する大きな魅力の一つである。本研究をきっかけに、毛馬内盆踊りに興味を持つ若者が一人でも増え、次世代に継承していくための力になってくれればと考えている。来年度の毛馬内盆踊りでは、十和田高校の生徒の皆さんを始め、多くの若者が足を運んでくれることを願うばかりである。

今後は、毛馬内盆踊りの更なる魅力発見と発信を行うことで、毛馬内盆踊りの発展はもちろん、鹿角に魅力を感じる人々が増え、地域全体の発展に繋がるようにしていきたい。

参考文献 『重要無形民俗文化財 毛馬内の盆踊』